

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：32665

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580115

研究課題名(和文) LMSを使った英語教員が作成できるe-learningプログラムの開発

研究課題名(英文) Developing an e-learning program which English teachers can make by means of LMS

研究代表者

川嶋 正士 (KAWASHIMA, Mawashi)

日本大学・工学部・教授

研究者番号：50248720

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：独自のLMS(学習管理システム)を用いて、英語教員が作成可能なe-learningプログラムを作成しました。最新のJava Scriptに対応していませんが、Vocabularyに関しては桐原書店の協力のもとDatabase 3000の一部を用いて音声・例文・日本語訳を伴う多岐選択と綴りを入力するコンテンツを作成しました。Pattern Practiceでは記述式のコンテンツに音声のヒントをつけました。この3年間の研究期間で5回の国際会議を含む15回の発表と10編の有審査論文、1冊の著書(国際文化表現学会賞受賞)という研究成果を上げることができました。

研究成果の概要(英文)：I have developed e-learning programs which English teachers can make by means of LMS. I have made two contents: (1) vocabulary building with multiple and spelling filling drills and (2) text filling pattern practice drills. The former has been made possible with the help of Kirihiro Shoten, whose CD recordings and Japanese translation were added to the contents along with example sentences. Pattern practice contents have also been provided with original recordings, which students can count on when they make errors or cannot think of correct answers. In these three years, I have read 15 paper presentations, including 5 International Conferences, written 10 refereed papers and a book, which has been awarded by International Society for Cultural Expression in 2016.

研究分野：英語教育

キーワード：e-learning 学習英文法

1. 研究開始当初の背景

採択者が本課題で挑戦的萌芽研究に臨んだ時期は、MoodleなどのLMS (Learning Management System) もあまり開発が進んでいない段階でプログラミングに詳しくない英語教員が学修コンテンツを作成できる手段が普及していない中で英語教員が作成できるプログラミングの雛型になるものに対する需要と高い社会的還元性を感じていた。

2. 研究の目的

(1) 上記背景を改善するためにHTML/XMLを作成し、LMSにのせ、実際に稼働し、学習効果が上がるかを研究することを目的とした。

(2) 学修コンテンツをより合理的なものにするために、規範英文法より発達した学習英文法を史的に研究することとした。これにより、現在非合理的な暗鬼に頼るしかない英文法の組織と文法用語などの改善の基礎となり、将来的に発展したコンテンツに還元させることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究は、日本大学工学部渡辺研究室が開発したLMS (WebCAI) を用いた。



2種のコンテンツを作成し、これらを用いた学修を運営した。

(2) コンテンツは桐原書店の許可のもと『Database 3000』の後半部をデジタル化し、それらに例文と音声を加えた多岐選択問題を約1000問作成した。平成27年度にはこれらのコンテンツに記述式の問題を加え、単調な学習のみならず、自ら綴りを打ち込むことで能動的な学修ができるようにした。

(3) 基本的な疑問文や否定文の転換を行う記述式コンテンツも作成し、これらにより学習者が文構造等がより詳しく理解できるようにした。

4. 研究成果

(1) 平成26年よりコンテンツ化は順調に進んだ。この年には多岐選択の語彙問題を1000問作成した。



文転換のコンテンツは単純な疑問文・否定文とWh-移動を伴う疑問文を学習するコンテンツを合わせて160問作成した。

4-9

下線部が答えになる疑問文を作りなさい。

あなたは毎日一時間英語を勉強します。
You study English for an hour every day.

(2) 平成27年度は単調な出題形式であった多岐選択の語彙問題のコンテンツに例文・音声を加えた。



さらには出題される単語の綴りを記述させるコンテンツを作成した。



(3) 平成28年度は、これらの内容を用いて教えたクラスと統制群の対照実験をデータ化した。これらの研究成果は5つの国際会議を含む15回の研究発表として提示された。これをまとめた論文は、日本学術会議協力学術団体である諸学会に採択された有審査論文13件(単著10、共著2(第1著者)1、共著(第1著者以外)1)、無審査論文1と著書1(平成28年度国際文化表現学会賞受賞)として発表された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計13件)

① 川嶋正士 (2017). 「19世紀規範文法における文分析の誕生と間接的決定因子」日本情報ディレクトリ学会誌』14, pp. 82-91(査読有)

② 川嶋正士 (2016). 「「二重目的語構文」と「第4文型」—「5文型」編成における機能と形式の乖離—」『国際文化表現研究』12, pp.273-288. (査読有)

③ Kawashima, Masashi and Hiroyuki

Watanabe (2016). “Developing English Learning Courseware for an e-learning System Named WebCAI”. *Japan Society of Directories*, 14, pp.154-161. (査読有)

④ 川嶋正士 (2016). 「小田勝己氏の書評に
応えて」『日本英語教育史研究』31, pp.
137-144. (小田勝己 (2016)「川嶋正士著『5
文型』論考—Parallel Grammar Series, Part II
の検証』の [書評]に対するリプライコメン
ト: 査読無)

⑤ 川嶋正士 (2015). 「二重目的語」の誕生
—英文法における統語分析の萌芽』『比較文
化研究』119, pp. 69-80. (査読有)

⑥ 川嶋正士 (2015). 「100 年前の Principle
and Parameter : E. A. Sonnenschein の失敗の
原因と帰結」『比較文化研究』116,
pp.141-159. (査読有)

⑦ Kawashima, Masashi. (2015). “Why Have
Students Hated Grammar? —Historical Study
of Its Incomprehension in England and Japan.”.
*Expressions: International Cultural Expression
Studies*, 11, pp.149-168. (査読有)

⑧ 川嶋正士 (2015). 「英文法学習における
「説明」と「理解」: 「5 文型」の事例」『日
本情報ディレクトリ学会誌』12, pp.60-69.
(査読有)

⑨ 渡邊博之、川嶋正士 (2015) 「繰り返し
学習型コースウェアにおける学習時間の
MTS による分析」『電気情報通信学会 論
文誌』J98/1, pp.163-166. (査読有)

⑩ 川嶋正士 (2014). 「英国における「5 文
型」の誕生と消滅」『比較文化研究』112, pp.
21-39. (査読有)

⑪ 川嶋正士 (2014). 「「5 文型」成立事情—
細江逸記の功罪」『国際文化表現研究』10, pp.
33-53. (査読有)

⑫ 川嶋正士 (2014). 「5 文型の実態調査:
仮説の検証」『日本情報ディレクトリ学会
誌』12, pp. 80-89. (査読有)

⑬ 川嶋正士 (2014). 「英語 5 文型の再分析
— “Comprehension Based Grammar” 序章」
『比較文化研究』110, pp. 127-138. (査読
有)

[学会発表] (計 17 件)

① Kawashima, Masashi (2017). “Five Forms

of the Predicate: The Progenitor of
Idiosyncratic Grammar Teaching seen only in
Japan” Annual Multidisciplinary Conference,
Vienna, Austria. June 26, 2017.

② 川嶋正士 (2017). 「19 世紀規範統語論に
おける「完成」という概念—「5 文型」断
章 2017」日本英語教育史学会第 33 回全国
大会 (日本大学工学部、福島県郡山市 2017
年 5 月 20 日)

③ 川嶋正士 (2017). 「古きをたずね、新しき
を知る: 中村捷編著『名著に学ぶ これから
の英語教育と教授法』を素材に (中村捷氏発
表の指定討論者)」日本英語教育史学会 第
262 回研究例会 (しんらん交流館、京都府京
都市 2017 年 3 月 18 日)

④ Kawashima, Masashi (2017). “Text-filling
Content Creation and Flipped Classroom for
e-learning.” Thailand TESOL 2017, Bangkok,
Thailand. January 20, 2017.

⑤ 川嶋正士 (2016). 「19 世紀前半における
英文法の諸問題—「5 文型」研究中間報告」
日本情報ディレクトリ学会 第 20 回全国大
会 (青山学院大学、東京都渋谷区 2016 年 9
月 2 日)

⑥ Kawashima, Masashi and Daisuke
Uetake. (2016). Text-filling Content Creation for
E-learning. MICOLLAC 2016. Penang, Malaysia.
August 17, 2016.

⑦ 川嶋正士 (2016). 「Thomas Kerchever
Arnold (1848) が提唱した ‘Complement’—
「5 文型」断章 2016」日本英語教育史学会
第 32 回全国大会 (東京電機大学、東京都足
立区 2016 年 5 月 15 日)

⑧ 川嶋正士 (2016). 「「間接目的語」の誕生
—19 世紀における帰納法的統語分析の一
産物」国際文化表現学会 第 12 回全国大会
(日本大学法学部、東京都文京区 2016 年 5
月 7 日)

⑨ 川嶋正士 (2015). 「学習英文法における
逆欠如現象: 川嶋正士著『「5 文型」論考
—Parallel Grammar Series, Part II の検証』を
素材に」日本英語教育史学会第 255 回研究
例会 (東京電機大学、東京都足立区 2015 年
11 月 15 日)

⑩ Kawashima, Masashi and Hiroyuki
Watanabe. (2015). “An Interdisciplinary
Collaboration for Constructing E-learning
Contents for English Classes” 1st
INTERNATIONAL CONFERENCE ON
ENGLISH AND ITS EDUCATIONAL
DYNAMICS. Makassar, Indonesia. September

26, 2015.

⑪ 川嶋正士, 渡邊博之 (2015). 「日本大学工学部における英語 e-learning コンテンツ開発の学際的試み」日本情報ディレクトリ学会第 12 回全国大会 (大阪体育大学、大阪府泉南郡熊取町 2015 年 9 月 6 日)

⑫ 川嶋正士 (2015). 「「5 文型」の起源にみられる科学性と保守性」全国英語教育学会第 41 回全国大会 (熊本学園大学、熊本県熊本市 2015 年 8 月 23 日)

⑬ 川嶋正士 (2015). 「「5 文型」断章」日本英語教育史学会第 31 回全国大会 (久留米高等専門学校、福岡県久留米市 2015 年 5 月 17 日)

⑭ Kawashima, Masashi and Hiroyuki Watanabe (2015). “Developing English Learning Courseware for an e-learning System Named WebCAI”. PAC@Thailand TESOL 35th International Conference. Bangkok, Thailand. January 29, 2015.

⑮ 川嶋正士, 渡邊博之 (2014). 「英語コースウェアを用いた WebCAI システムの開発」日本大学工学部学術研究報告会 (日本大学工学部、福島県郡山市 2014 年 12 月 13 日)

⑯ Kawashima, Masashi (2014). “Why Have Students Hated Grammar?” JACET 53rd International Convention. Hiroshima, Japan. August 28, 2014

⑰ 川嶋正士 (2014). 「100 年前の Principle and Parameter」国際文化表現学会第 10 回全国大会 (日本大学国際関係学部、静岡県三島市 2014 年 5 月 9 日)

〔図書〕(計 1 件)

川嶋正士 (2015). 『「5 文型」論考—Parallel Grammar Series, Part II の検証』(朝日出版社, **平成 28 年度国際文化表現学会賞**)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 件)

名称 :

発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

○取得状況 (計 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年月日 :
国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

<http://kenkyu-web.cin.nihon-u.ac.jp/Profiles/47/004610/profile.html>

<https://www.facebook.com/masashikawashimanihonuniversity>

6. 研究組織

(1)研究代表者

川嶋 正士 (KAWASHIMA, Masashi)
日本大学・工学部・教授
研究者番号 : 50248720

(2)研究分担者

渡邊 博之 (WATANABE, Hiroyuki)
日本大学・工学部・教授
研究者番号 : 40147658

(3)連携研究者

()

研究者番号 :

(4)研究協力者

()